**中学生の部 ：　ふくしま被害者支援センター理事長賞**

**最後の言葉**

県立郡山萌世高等学校３年 　國分 麻友香

「さようなら。ありがとう。」

これは友人が私に宛てて書いてくれた手紙の、一番最後に書いてあった言葉です。送り主の友人は、もうこの世にはいません。希望に心を躍らせた高校一年の春、彼女は自ら命を絶ちました。

 彼女とは高校に入学してすぐ、音楽の授業を通して親しくなりました。歌うことが大好きなのだと言った彼女は、人見知りの激しい私にも明るく接してくれる優しい人でした。学校生活にも慣れてきたある日、彼女は私にとある悩みを打ち明けてくれました。友達との関係についての不安、体調を崩しがちで思うように学校に通えていないなど、様々な話を語ってくれたのです。私は、ただそれを聞いて彼女を励ますことしか出来なかったけれど、それでも彼女は「ありがとう。」と言って笑ってくれました。その数日後、私は彼女の死を知ることになるのです。

　ある朝、私がいつものように登校すると机の上に一つのクリアファイルが置いてありました。中には彼女に貸していたルーズリーフと、一枚の手紙が入っていました。後でゆっくりと読もうと思い授業を受ける支度をしていると、チャイムがなり担任の口から彼女の死を知らされました。突然のことに驚き、涙はでませんでした。

家に帰り、彼女からの手紙を読みました。そこには、私に対する感謝や謝罪、そして別れの言葉が綴られていました。一字一字、丁寧に書かれた文字からは、彼女が精一杯心を込めて書いてくれたのが分かりました。ですが、私にはそれらが空虚な文字の羅列にしか見えませんでした。どうしてこんなもの私に書いたの？こんなもの残すくらいだったら、ずっと一緒に居てほしかった。いらないよ、こんな手紙。当時の私は、手紙を読み返してはそんなことばかり思っていました。　けれど、今は何となくですが彼女の思いが分かるような気がします。きっとあの手紙は「内容」よりも「残す」ことに意味があったのでしょう。

 「私のことを忘れないで。」

そんなメッセージが隠されているように思いました。当時の私が手紙から感じた虚しさはきっと、この隠されたメッセージによるものだったのです。彼女は忘れ去られることを望んではいないのに、もうこの世には存在していない。そう思うと胸が締めつけられ、後悔と自分の情けなさから涙がこみ上げてきました。しかし、私はこの気持ちを彼女に伝えることは出来ないし、結局彼女の自殺の原因は分からないままです。

 人間は幼少期に誰もが、「人を傷つけてはいけない」「人を殺めてはいけない」と教わります。ならば自殺も同じことです。自殺は自分自身を対象にした殺人だと私は思います。だから、どんな事情があろうと、たとえ自分の命だとしても、自ら命を絶つことは絶対に許されないことなのです。

「そんなことは所詮綺麗事だし、死ぬ勇気のない奴の言うことだ。」と思われるかもしれません。それでも私は、死ねる度胸があるのなら、まだ見えぬ明日に挑むことが出来ると信じています。

 今でも彼女の自殺は仕方のないことだったとは思えないし、私の中の自責の念が消えることはありません。あれから二年半の歳月が過ぎ、同級生には彼女のことを知らない人さえいます。けれど、私は絶対に忘れません。彼女と過ごした時間は、私の人生の中でわずか一ヶ月にも満たない短い時間でした。でも私は彼女がいたことを決して忘れません。そして、もしもう一度彼女に会えるとするならば私は彼女に、

「さようなら。ありがとう。」

と伝えたいです。